

紙は一般に文化情報を記録・印刷して広く伝え、また後世に継承される素材、すなわち書写材と論じられ、西洋ではとくに印刷適性を重視して紙質を評価するのが主流となっている。しかし、東洋の紙、伝統の手漉き紙は、書写材としてのほかに生活文化材としての広い用途があった。

イギリスの著名な科学史家、ニーダム(Joseph Needham)の要請にこたえて、図書印刷史の最高権威のひとりである、シカゴ大学東亜図書館名誉館長だった銭存訓(Tsien Tsuen-hsuei)が書いた*Science and Civilisation in China, vol. 5, part 1, Paper and Printing* (Cambridge, 1985)は国際学界に高く評価されている。この英語版を増訂してその完成度をさらに高めた中国語版『紙和印刷文化史』(*Chinese Paper and Printing: A Cultural History*)が2004年に広西師範大学出版社から刊行され、私はその日本語訳を試み、近く刊行されるが、これは図書印刷史の専門書であるのに、約40%のページを紙関係の記述に充て、その第4章「紙の用途と紙製品」の中に、「紙は一般人の考えているように、最初から書写用であったとするのは正しくない」と記している。また「紙が重んじられるのは、主として価格が安く材質が軽いからであり、またそれによって各種の代用品をつくることのできるからである。長い世紀にわたって紙は高価でなくてはならない物品に代用されただけでなく、その材質は他の物品では供給できない独自の用途に使われている」とも述べている。

そして紙製品の起源と発展を系統的に研究し、紀元前2世紀からすでに包装に用いられ、3世紀から9世紀にかけて布地・木材・皮革・金属の代用品として使い始められた歴史をたどっている。そのうち金属に代用されたものには紙甲(紙の^{よろい}鎧)と紙幣がある。紙甲は重くて錆びやすい鉄製の代わりに軽い紙製の鎧を用いたもので、高温で湿地の多い中国南部の兵士たちが愛用した。紙幣は持ち運ぶのに不便な金属貨幣に代替するもので、経済社会の交流・発展を推進した画期的な紙製品であり、9世紀に開発されている。

西洋で製紙が始まったのは12世紀であり、生活文化材として利用したのはようやく18世紀後期からで、その用途は局限されており、中国では西洋で製紙の始まるよりはるかに早い時期から紙製品の生活文化材としての活用が普及していた。中国古代の紙は韌皮繊維を主原料とし、西洋では用いない紙薬(漂着剤、滑水ともいい、日本ではネリという)を紙料液に混和して均等な厚さでねばり強く耐久性のあるものが漉かれていたからである。紙薬は固まり沈澱しやすい紙料繊維を均等に分散させ漂い浮かばせておく作用があり、紙面の厚さを均等にするとともに美しく滑らかにし、漉き具を揺り動かす操作によってねばり強く破れにくい紙層を形成することができる。この原料と独特の製法によって造ったのが東洋の紙の特徴であり、その紙質が多彩な用途をはぐくんだのである。

中国の著名な紙史研究者、潘吉星(Pan Jixin)は『中国製紙技術史稿』のなかで、唐代を中国製紙史の黄金時代とし、「文化的用途や文書のほか、多くの日用品もすべて紙製品か紙製代用品を採用した」と述べている。唐代(581-907)までの中国の紙の主原料はアサ(*Cannabis sativa* L.)、カジノキ(*Broussonetia papyrifera* Vent.)、フジ(*Cocculus trilobus* Dc.)などの韌皮繊維であったが、宋代(960-1227)からはモウソウチク(*Phyllostachys pubescens* Ohwi)、ハチク(*P. nigra* var. *henonis* Stapf.)などの竹類が主原料となり、竹紙はもろく裂けやすく耐久性は乏しいので、生活文化的な用途は狭まった。

しかし、日本や韓国ではコウゾ(*Broussonetia kazinoki* × *B. papyrifera*)を主原料とする伝統を守り、ネリを活用した流し漉き技法を洗練させて、ね

ばり強く耐久性のある紙をつくり続けたので、生活文化材としての用途は中国よりさらに広く多彩であった。

日本では、製紙法を導入すると同時に書写材としての加工を始めている。奈良の正倉院には奈良時代(710-

793)に仏教経典を書写した写経料紙が数多く収蔵されているが、そのほとんどは黄色または黄茶色に染められ、紫色や紺色の紙には金銀泥で書写し仏画を描いて装飾している。

平安時代(794-1180)には生活用品の加工が始まり、細い紙片を撚った紙縷こよりで頭髪を結ぶ元結もとゆい、コンニャク糊で張り継ぎ柿渋を引き強化して揉みやわらげた紙衣かみ こ

、油で防水した油単ゆたん、油団ゆたんなどの布地代用品がつくられた。中国の紋唐紙

を和紙で模造した加工紙は「からかみ」といい、もともと和歌を書く料紙であったが、襖障子の表張りとして建具に用いられるようになった。12世紀末から16世紀後半期までの中世には柿渋を塗って防水性と防腐性を与えた渋紙の利用がひろまり、江戸時代(1603-1867)には多種の日常生活用品がつくられた。

住宅の建具用としてはからかみのほかに間似合紙まにあいがみ、障子紙、紋書院紙もんしよんし、泰平紙たいへいしが加わり、布地の代用には紙布、傘紙かっぱがみ、合羽紙あわがみが考案され、柿渋・漆を塗る一閑張いっかんぼり、紙長門ながとは木材、金属にも代用できる什器じゆうき、武具となった。皮革に代用できる擬革紙ぎかくし

は主として煙草入れなど袋物加工の素材であったが、明治期(1868-

1912)には、これが壁装用の金革紙となり、1873年のウィーン万国博に出展したのが好評を得て、欧米への重要な輸出品となった。

これらの紙製品が市民の日常生活を広範囲にささえ、「紙は日々の暮らしになくてはならない必需品」となったが、耐久性という点では一閑張と紙長門が特に注目される。一閑張いっかんぼり

は渋煎しぶせん(ワラビ粉の糊に柿渋を練り合わせたもの)で木型に張り重ねて抜いた紙型はりぬき(張賞)

)、あるいは竹または木製の器に紙を張り重ねたものに柿渋や漆を塗ったもので、手文庫・枕たかつき・高杯たかつき・皿・鉢・茶入筒・書状箱かぶと・火事兜

などがある。紙長門は張り重ねた紙でなく、細く撚った紙糸(こより)を編んで器物を成形し、漆で塗り固めたきわめて堅牢な生活用品で、印籠いんろう

のほか水筒・酒器・弁当箱・椀・鉢・机こくり・行李こくり・炭入れ、さらに火薬入れ・矢筒たかじょう・鷹匠たかじょう笠かさ

などが作られていた。金属や木材の代用品であるが、非常に軽く、しかも錆びたり朽ちることはないのにより耐久力があって長く使うことができた。

金革紙は各種加工技法を総合して加工和紙の頂点に位置する製品といえるが、フランスの画家、レガメ(F_lix

R_gamey)はその著*Japan*のなかで、その製造工程を図解して「日本の芸術産業」と記している。HAND PAPERMAKING Vol.10 No.2(Winter1995)にはDan Fletcherの*Chirimen-gami*が収録されているが、この縮緬紙^{ちりめんがみ}は19世紀初期に始まり、明治期(1868-1911)には来航した欧米人が日本の童話を英訳して「ちりめん本」づくりを楽しんだ。縮緬紙には細かい皺紋がついており、紙衣などの布地に代用した製品も揉みやわらげて皺紋をつけている。書写材としての紙に皺紋をつけるのはタブーであり、弱い紙質のものは破れるが、和紙にはそのような加工に耐える弾力性、耐折性が備わっているため、こんな特殊な加工技法を施すことができたのである。

和紙は軟らかい毛筆で書くのに適しているが、西洋の羽毛や金属ペンの硬い筆記具で書くのにはふさわしくない。しかし、19世紀から日本に来航した西洋の知識人たちの記録には、日本の手漉き紙のすばらしさを賞賛しているのが多い。彼らが筆写あるいは印刷するには適しないはずの和紙をたたえているのは、書写以外の広い用途があることに感嘆したからである。

1860年に来航したプロシアの使節、オイレンブルク(Friedrich A. Eulenburg)に随行した画家、ベルク(A.Berg)らが書いた『オイレンブルク日本遠征記』(*Die Preussische Expedition nach Ost-Asien nach Amtlichen Quellen*,1864)には、「紙の用途がこの国より広いところはどこにもないであろう。紙は書くこと、印刷することのほかに、窓ガラス、ハンカチ、衣類、ランプの芯、紐、その他いろいろのものに使われているが、とくにすぐれているのは皮革として用いられるものである」と記している。

イギリスのパークス(Harry S. Parks)公使が1871年に本国に送った『日本紙調査報告』(*Reports on the Manufacture of Paper in Japan*)には、紙衣・合羽・擬革紙・油団・縮緬紙の製法が収録され、1873年来航して2年間産業と地理を調査したプロシアの地理学者、ライン(Johannes J. Rein)の『日本産業誌』(*Japan nach Reisen und Studien im Auflage der Königlich Preussischen Regierung dargestellt*,1886)は「日本の手漉き紙はわれわれの機械すき紙や化学的にぼろ布を再生する手漉き紙よりも、際立ってすぐれており、長く保存するためのあらゆる条件を備えている」として多様な用途を列挙し、また工場の現地調査に基づいて紙布・油紙・合羽紙・

防水紙・擬革紙・縮緬紙の加工法も詳述している。

世界各地の紙漉き場を巡歴した紙史研究の権威、ハンター(Dard Hunter)は『日本・韓国・中国への製紙行脚』(*A Papermaking Pilgrimage to Japan, Korea and China*, 1936)の序説のなかで、和紙を世界最高の技術によるすばらしい紙と評価して次のように記している。

It is not an exaggeration to state that the present-day handmade papers of Japan are the technical marvel of the entire papermaker's craft.

しかし、この和紙に対する高い評価は書写材としてではなく、広い用途があるからであり、その序説には、「日本人は何度も使える耐久性のある紙をつくることができる」「日本人が紙をほとんど無限ともいえる用途に使っていることは驚くばかりである」と記している。彼らは、このように日常生活の広い用途に使われている特質を洞察して、和紙のすばらしさをたたえたのである。

イギリスの初代駐日公使、オルコック(Ratherford Alcock)はその著『日本の芸術と芸術産業』(*Art and Art Industries in Japan*)のなかに「私は数百の文様のある紙のコレクションを1862年の博覧会に送ったが、それはわれわれの室内装飾業者や顧客が活用できると思ったからである」と記している。それはロンドンのVictoria & Albert Museumに保管されているが、すべて江戸の唐紙師に特製させたものであった。彼もまた加工和紙をたたえたひとりであり、明治期に送られたは数多くのコレクションがヨーロッパ各地の博物館に保管されているが、その内容は書写用の白紙よりも生活文化材的な用途の加工和紙が多く、前記の来航知識人たちの評価が、そのコレクションに反映されている。

これらのコレクションを収蔵しているのは、イギリスではロンドンのV.& A.MuseumとThe Botanical Garden, Kew. そしてグラスゴーのArt Gallery and Museum, Kelvingrove.

ドイツではライプチヒのDeutsches Buch-und Schriftmuseum、ベルリンのKunstbibliothek Preussischer Kulturbesitz. オランダではライデンのRijksmuseum voor Volkenkunde. フランスではパリのMusée des Arts DecoratifsとBibliothèque Forney.そしてデンマークの国立博物館などである。私はそれらのコレクションを調べて

1998年に『和紙—多彩な用と美—』(玉川大学出版部)を出版した。

これらの博物館めぐりでは、オルコックの言っているように、ヨーロッパでは室内装飾に用いられるかみかみ(襖障子表張りの紙)と壁装用の紙にとくに関心が深いように感じられた。日本で住宅の建具に用いられた、いわゆるインテリア材としての紙で、フランスの壁紙デザインにはからかみの文様が影響を与えたといわれている。しかし、ヨーロッパには襖障子はなく、実用されたのはからかみよりも、むしろ壁紙が多かったと考えられ、イギリスとオランダの王宮には、金革壁紙が用いられている。

擬革紙の加工法をくわしく記したラインのコレクションはベルリンの工芸図書館に保管され、90点は擬革紙で「東海道五十三次」の版画や「源氏物語絵巻」に取材した和風デザインのものもふくんでいる。ライプチヒのドイツ書籍文書博物館には約220点の擬革紙と5冊の擬革見本帳(約160点)が収蔵されており、東京の竹屋が創製して1873年のウィーン万国博会場の日本庭園茶室に張った金革壁紙の断片をふくんでいる。金革紙は通常木製ロールで浮凸した文様を打ち出し、紋章、花綱、パルメット(palmette)、クワブ(kwab,軟骨)などヨーロッパ風の装飾デザインが優勢であるが、ライプチヒのコレクションには和風のデザインがめだち、創成期の金革壁紙は版木を用いて和風の草花文様を描いている。

金革紙はオランダ語でgoudleerといい、オランダとの交易によってもたらされたこの皮革製品を日本語では金唐革^{きんからかわ}と呼び、それを和紙で模造した初期には「金革紙^{きんかわがみ}」の名で万国博に出展した。「金唐革紙^{きんからかわがみ}」と呼んだのは1930年頃からであるが、いわば東西文化の交流を象徴する製品のひとついえる。そして江戸時代には小判の紙で加工し、煙草入れなどの袋物に限定して用いていたが、明治期にヨーロッパから来航した人たちの助言で、大判の壁紙として輸出したのである。擬革紙見本帳の紙裏などには、R34541のようにRを冠した番号が押されているが、このRはイギリスのロットマン壁紙商会(Rottman Wallpaper Company)を意味するといわれ、ヨーロッパに加工和紙の販売網も形成されていたのである。

このように、和紙は書写材としてだけでなくきわめて広く多彩な用途に活用されたことに、そのすぐれた特徴があったのである。

久米康生 YASUO KUME 1921年生まれ、和紙文化研究会(Society for Study of Washi Culture)の代表。和紙関係の著書は『和紙文化辞典』『和紙文化誌』『手漉和紙聚芳』『彩飾和紙譜』など30余部、中国の紙史と対照して和紙を正しく理解しようとする視点での著書には、『和紙の源流—東洋手すき紙の多彩な伝統一』がある。

